

## 『パラオ熱帯生物研究所関係資料』について

佐藤 崇 範

### パラオ熱帯生物研究所について

パラオ熱帯生物研究所 (Palao Tropical Biological Station; 以下、PTBS) は、1934 (昭和9) 年に、当時、日本の委任統治下にあったパラオのコロール島<sup>1)</sup>に、財団法人日本学術振興会によって設置された研究施設である<sup>2)</sup>。

日本学術振興会は、1933 (昭和8) 年10月、第7 常置委員会に熱帯生物研究に係る小委員会 (第11小委員会) を設置した。1934 (昭和9) 年1月には第1 回会議が行われ、柴田桂太 (東京帝国大学教授) を委員長に選出、第1 期事業として、「珊瑚礁ニ関スル生物学的総合研究」を行うことが決議された。なお、委員の一人であり、後にPTBS 所長を委嘱される畑井新喜司 (東北帝国大学理学部教授) は、第1 回会議の直前、1933 (昭和8) 年12月10日～1934 (昭和9) 年1月4日の間に、パラオで「準備調査」を行っている。

PTBS に派遣された研究員のほとんどは20～30代の講師、助手、副手、大学院生などの若手研究者であった。常に3 名前後の研究員が入れ替わりで派遣され、1943 (昭和18) 年に閉鎖されるまでの約10年間に27名の研究員 (他に2 名の現地委嘱研究員) が、各々の研究テーマに合わせて数ヶ月～数年の間、PTBS を拠点として研究に取り組んだ。

派遣研究員らの研究成果は、日本学術振興会発行の研究所欧文報告、“Palao Tropical Biological Station Studies” (全2 巻8号、1937 (昭和12)～1944 (昭和19) 年) と和文雑誌「科学南洋」 (全5 巻14号、1938 (昭和13)～1943 (昭和18) 年)<sup>3)</sup>などで発表された。

PTBS は1943 (昭和18) 年3 月末に閉鎖されたが、その設備・資材等は、同年7 月にセレベス島 (現スラウェシ島) に開所した海軍のマカッサル研究所に引き継がれ、建物は南洋庁に寄付された。

### パラオ熱帯生物研究所関係資料について

#### 1 資料の由来

パラオ熱帯生物研究所関係資料は、東北大学史料館に2 回にわたって寄贈された5 点から構成されている。

- (1) 2016年11月2日、大森信氏 (東京海洋大学名誉教授) から「パラオ熱帯生物研究所日誌」1 点寄贈

「パラオ熱帯生物研究所日誌」 (以下、「研究所日誌」) は、PTBS 閉鎖後、現地で設備・資材等の整理にあたった研究員の加藤源治によって持ち帰られた。戦後、加藤の他に同じく研究員だった元田茂、阿刀田研二などの手元で一時保管されてきたが、1992 (平成4) 年に加藤が他界した後は、加藤夫人より元田へと渡された。1995 (平成7) 年に元田が他界した後は、ご子息である元田進氏により保管されてきた。2015 (平成27) 年11月に、大森信氏と筆者が、元田進氏宅で元田茂の資料整理を行った際に「研究所日誌」の所在を確認、元田進氏より大森信氏に「研究所日誌」が移譲され、東北大学史料館に寄贈されるに至った。

(2) 2017年4月25日、(一財)熱帯海洋生態研究振興財団・阿嘉島臨海研究所(沖縄県座間味村)から「岩山会会報第一号(一九三九) - 第九号(一九六九) 原本」、「日本学術振興会パラオ熱帯生物研究所 岩山会会報 第一号(一九三九) - 第十七号(一九八七)」、「南洋群島ノート(戦前) 1」、「南洋群島地図(戦前)、ノート(戦後) 2」計4点寄贈

これらの資料は、元田茂から阿嘉島臨海研究所(当時の所長は大森信氏)に贈られたものであり、大森信氏を介して東北大学史料館に寄贈された。

## 2 資料の概要

### (1) パラオ熱帯生物研究所日誌

3穴ビス止め製本(B5版)されており、黒表紙に金文字で表題が付されている。これは、元田茂によって1977(昭和52)年に製本されたものであり、1994(平成6)年に元田によってページが追加されている。

「研究所日誌」は、パラオ熱帯生物研究所日誌の原本(以下、研究所日誌原本:ノート6冊とルーズリーフをホチキス留めしたもの6点)と1992(平成4)~1993(平成5)年に阿刀田研二によって作成された清書版(以下、研究所日誌清書版:ルーズリーフをホチキス留めしたもの2点)、PTBSに関する重要なトピックをまとめた「重要事項抜粋」(ノート1冊とルーズリーフをホチキス留めしたもの1点)の原本と、阿刀田によって作成された清書版(ルーズリーフをホチキス留めしたもの1点)、その他、ページ追加時に元田が作成した前書き・研究所沿革等(1994(平成6)年)、パラオでの調査の基礎となった測量図「岩山湾附近全図」(1934(昭和9)年)とそれを参照して作成された地図(1937(昭和12)年)、畑井新喜司所長による所長宿舍落成式時の挨拶文草稿(1942(昭和17)年)といった関連資料が合綴されている。なお、研究所日誌原本の6冊のノートに表紙はない。

研究所日誌原本は、1936(昭和11)年5月4日に元田によって自主的に書き始められて以降、1943(昭和18)年6月20日<sup>4)</sup>までに、7名の研究員<sup>5)</sup>(元田茂、山内年彦、島津久健、阿刀田研二、加藤源治、大平辰秋、熊野正雄<sup>6)</sup>、(加藤源治)の順)が担当者となって書き継がれた<sup>7)</sup>。また、研究所日誌清書版は1938(昭和13)年4月4日~1941(昭和16)年7月19日の期間を対象としている。重要事項抜粋は、原本、清書版とも1933年12月~1943年6月12日の期間について記されている。

研究所日誌には研究員等の活動概要や健康状態、PTBSへの人物往来、PTBS運営上の記録などが中心に記されており、各研究員の調査・実験進行状況等、研究の詳細については記されていない<sup>8)</sup>。

### (2) 岩山会会報第一号(一九三九) - 第九号(一九六九) 原本

紐綴じされ厚紙のカバーがつけられている。

岩山会会報の原本9冊のほか、岩山会関連文書(畑井新喜司祝賀会に関する文書、所長宿舍の新築に関する報告)、会員名簿2冊が合綴されている。岩山会会報等に多くの書き込みがみられる。

岩山会会報は、PTBSに派遣された研究員及び第11小委員会委員とPTBSに関わりの深かった研究者・関係者等をメンバーとした同窓会的組織「岩山会」の会誌である。PTBSの活動期

間中である戦前・戦中に第1号(1939(昭和14)年)～第6号(1942(昭和17)年)が発行された。戦後は、第7号が1954(昭和29)年に発行され、以降、不定期に第18号(1993(平成5)年)まで発行された。

岩山会会報第1～9号の原本は、「謄写刷り」(謄写版印刷)で発行されたものである。1989(平成元)年、元田は、謄写刷りの岩山会報を活字化して復刻版を作成し、岩山会会員に再配布した。現在、岩山会会報は、国立国会図書館、沖縄県立図書館などで閲覧可能であるが、両館に収蔵されている1～9号は復刻版である。

### (3) 日本学術振興会パラオ熱帯生物研究所 岩山会会報 第一号(一九三九)－第十七号(一九八七)

紐綴じされ厚紙のカバーがつけられている。表紙にはパラオの伝統的建築物であるアバイの絵と「PALAU」の文字が描かれている。

岩山会会報第1～6号の復刻版(合冊)、第7～9号の各号の復刻版、第10～17号のオリジナル版のほか、元田が1981年に発表した論文の別刷が合綴されている。第11号、第13号には、送付時に添付したと思われる会計報告や正誤表、関連情報などもみられるほか、岩山会会報第18号のオリジナル版も挟み込まれている。

### (4) 南洋群島ノート(戦前) 1

紐綴じされ厚紙のカバーがつけられている。「研究所日誌」の作成・保管、岩山会の運営に中心となって関わった元田茂の個人資料である。

元田によるプランクトン調査の記録(フィールドノート、データシート等)、PTBS関連情報のまとめ、論文原稿、手稿類(「病気日記」、「パラオ本島巡行記録」、「横浜からサイパンまで昭和10年5月、筑後丸にて」など)、新聞切抜(南洋関係の記事、1980(昭和55)年の加藤源治に関する記事など)、写真(集合写真、風景、調査の様子などのモノクロプリント)など、主に戦前の南洋に関する多様な資料(戦後の資料も含む)が合綴されている。挟み込み資料も多い。

### (5) 南洋群島地図(戦前)、ノート(戦後) 2

紐綴じされ厚紙のカバーがつけられている。「南洋群島ノート(戦前) 1」同様、元田の個人資料である。

各種地図類(手書きのコロール島の地図や調査地の地図のほか、市販のパラオ全島、コロール周辺、ニューギニア島とオーストラリア北部の地図など)、論文等別刷及びコピー(今島実「ミクロネシアへ海の動物を求めて」、『自然科学と博物館』第50巻第2号、1983年、15-18頁/Motoda, Shigeru, 'Short history of marine science in Palau before the World War II', Palau Research Institute Symposium, 1979, pp. 1-25/阿刀田研二「水が苦手な不思議なカエル」、『斎藤報恩会自然史博物館博物館だより』No. 21、2-3頁など)、論文原稿・図表下書き、メモ、学会大会関連資料など主に戦前のパラオの地図と戦後のパラオやサンゴ礁研究に関する多様な資料が合綴されている。地図、書簡など挟み込み資料も多い。

## 参考文献

大森 信「パラオ熱帯生物研究所」、中森亨編『日本におけるサンゴ礁研究 I』、日本サンゴ礁学会、2002年、7-12頁。

坂野 徹「パラオ熱帯生物研究所—その誕生から終焉まで」、『化学史研究』第22巻、1995年、180-196頁。

佐藤崇範「『パラオ熱帯生物研究所日誌』の概要と今後の利活用について」、『みどりいし』No. 28、2017年、33-39頁。

日本学術振興会編『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要 第1回』、日本学術振興会、1936年、77-86頁。

日本学術振興会編『科学南洋』第1巻第1号、1938年、4-12頁。

元田 茂「研究所日誌より」、『岩山会会報』第11号、1977年、20-32頁。

元田 茂「かつて在りしパラオ熱帯生物研究所—その使命と成果」、『太平洋学会誌』第12号、1981年、7-29頁。

---

## 注

- 1) 1922 (大正11) 年に南洋庁が設置された。
- 2) 研究所の建物は1935 (昭和10) 年3月に、アラバケツ集落 (現、Ngerbeched 地区) に完成した。
- 3) この14号とは別に、資源科学研究所科学南洋編集部による「科学南洋」第15号が、1944 (昭和19) 年に北隆館から発行されている。
- 4) PTBS は1943 (昭和18) 年3月末で閉鎖されたが、設備・資材等の整理、発送や片付け作業は、加藤源治らによって同年6月まで続けられた。
- 5) 元田は、製本時に研究所日誌の記録担当者をまとめた「日記記帳者」一覧を作成し、「研究所日誌」に追加している。
- 6) 熱帯産業研究所技手で PTBS の嘱託職員でもあった熊沢誠義氏の間違いである可能性が高い。詳しくは佐藤 (2017) を参照されたい。
- 7) 原則として担当の研究員が派遣期間中続けて記録しているが、担当者が病気や調査旅行などで不在の際には、他の研究員が代理で記録しているケースもみられる。
- 8) 元田 (1977) によれば、研究所日誌には、以下の三ヶ条が記されていたという。  
「1. 各研究員の実験進行状況に就いては記さない。ただ他の参考になるような事は出来るだけ記入した。2. 外部との交渉、来訪者等に就いてはなるべく詳細に記録した。3. 船の出動を必ず記録した。」  
但し、現在、研究所日誌原本にはこの記述はみられない。なお、「船の出動」とは、PTBS が所有していた4隻の調査用船艇を指すものと思われる。